

研究センターニュース第86号

巻頭エッセー

医療生協の全国連合会づくりに あたって

北医療生活協同組合
専務理事 田島 明



研究センターNEWS

私は名古屋の北部を中心に活動している北医療生協で専務理事をしています。7年前から中部ブロックの推薦で日本生協連医療部会の運営委員をつとめています。医療部会では、現在全国連合会づくりが進められています。この11月から設立発起人会が発足し、2010年7月の生協連合会結成を目指します。

この全国連合会づくりは、日本生協連が組織機構改革で医療部会の独立を掲げたことに端を発したと思っていますが、一昨年、生協法が改正され、生協の行う事業に新たに医療と福祉が明記されたことが、連合会づくりを進める大きな転機になったと思います。連合会づくりの一番大きな目的は、医療・福祉を専門に行う生協のナショナルセンターとして単協の協同をすすめること、そして社会的な発言力を持ち、各単協の事業や運動を前進させるための政策を実現させることにあります。これまでは日本生協連の一部会であったため、わりと自由な行動や発言をしても、医療生協規制の攻撃からは日本生協連の傘の下で守られるという面がありました。同時に憲法の問題や消費税の問題では、日本生協連と意見を異にすることがあっても、社会的な発言ができないという制約もありました。連合会づくりはこの両面を自らの責任で、対応していかなければならなくなり、いろいろな意味でこれまで以上に生協組織の強化が求められると思っています。

民主党連合政権が発足し、政治は大きく変わろうとしています。先日の新聞によると全中(全国農協中央会)の総会に自民党から共産党まで来賓として招待され、これまでの自民党一党支持が見直されることになったようですし、医師会や歯科医師会なども政党支持の見直しがおこなわれました。医療・福祉の連合会ができれば、初めて直接政府と様々な交渉等を行うことになり、また政党との対応も必要になってきます。ある意味、これまで団体が特定政党支持を決め、構成員に選挙での協力を強制することが異常であり、政権交代によって本来のあり方になったような気がします。

ICA(国際協同組合同盟)の協同組合原則の第4番目には、「協同組合は、組合員が管理する自治的な自助組織である。協同組合は、政府を含む他の組織と取り決めを行ったり、外部からの資本を調達する際には、組合員による民主的管理を保証し、協同組合の自主性を保持する条件において行う」と書かれており、医療・福祉の連合会も政府や政党と一定の距離を保ちながら対していくこととなります。他の原則を含め、新生協連合会がICAの協同組合原則を最も具現化している協同組合組織だと評価されるような運営を目指したいと思っています。

特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

みかわ市民生協の福祉を学ぶ

「地域福祉を支える市民協同」パネル報告

研究センターの「地域福祉を支える市民協同」パネルが主催する公開企画として、2009年9月3日、みかわ市民生協の福祉についての訪問学習を行いました。

この企画の目的は、地域での福祉事業や福祉活動の実態を学び、そこから浮かび上がる生協像を探ることでした。パネルの世話人6名のほか、会員等7名の参加もあり、みかわ市民生協の福祉事業エリア統括グループマネージャーの佐宗健二さん、地域包括支援センターコープ豊橋中央のエリアマネージャーの川合富士美さんはじめ、みかわ市民生協のみなさんにお世話になり、多くを学ぶことができました。以下その概要を事務局で要約し紹介します。



■みかわ市民生協の福祉の現状

現在、みかわ市民生協は、介護サービスの事業所として、コープ福祉サービス（居宅介護支援＋訪問介護）が豊橋3、豊川1、蒲郡1、新城1、岡崎2、安城1、デイサービス・ケアコープが豊橋2、蒲郡1、岡崎1、安城1（6か所目が豊橋に10/1オープン）、ショートステイが豊橋1、福祉用具貸与・販売が豊橋1、岡崎1（9月1日オープン）あります。また、1993年に始まったくらしのすけあいの会は、現在、利用会員343名、活動会員236名、賛助会員495名で、年間13,200時間の活動時間になっています。

■組合員の願いと不安のなかでのスタート

1999年の総代会で、理事会からの福祉事業開始の提案に対し、くらしのすけあいの会で活動している人や家庭で介護経験のある人などから、生協で果たして責任ある事業をやっていきけるかといった心配の声が多く出され、提案は可決されたものの反対・保留も多くあり、その後、話し合いを重ね理解を広げる努力がおこなわれました。

多くの生協ではホームヘルプ、ケアプラン（居宅介護支援）、福祉用具貸与という3介護サービスから始めていましたが、みかわ市民生協では閉鎖された病院の建物が借りられたため、ここを改装しデイサービスやショートステイを始めようということになりました。当時、ショートステイをやることについては、「絶対赤字になりますよ」といった助言もありましたが、私（佐宗さん）も、ぜひやってほ

しいと役員にお願いし、最初からやることになりました。介護事業を始めるまで、みかわ市民生協には福祉の専門職はいなかったため外部から採用された人と、組合員さんで介護職の資格を取った方が一緒に働いてきました。とくにヘルパーの養成研修には力を入れ、これまでに42期、1311名が研修を修了しています。

■着実なあゆみで大きな実績をあげるまでに成長

みかわ市民生協では、豊橋市から地域包括支援センターの委託を受けています。当初は、在宅介護支援センターとしてスタートしたもので、24時間やっている施設でないといけないため、ショートステイをやっている生協だからうけることができたのです。公の事業の委託であり、地域の民生委員、自治会長、老人会長などとネットワークを作っていく上でこの看板があることの意味は大きいものでした。

2008年度の福祉事業高は9億8,300万円、事業剰余は1,700万のマイナスでしたが、今年度は新規に2つの事業所もオープンし、年度末見込みで約4,000万円のプラスで行けそうです。本部管理費を入れても経常剰余で1,000万円くらいのプラスになるでしょう。黒字は、みかわ市民生協として初めてです。今年度は報酬改定があり、特定加算などもとりプラスになって、ようやく経営面でも貢献ができることになりました。

みかわ市民生協の福祉事業がここまで成長したのは、第1に、働く職員が頑張ったこと（664名のスタッフ）、第2に、利用者さん、組合員さんの支えと励ましのなかで職員が徐々にプロフェッショナルになってきたこと、第3に、スタッフと組合員さんをつなぐ理事会が本気になってくれたことだと考えています。理事会内には福祉まちづくり小委員会があり、組合員理事もしっかりと学び、意見をもっています。毎月の経営会議（幹部会議）では、無店舗、店舗事業と同じ時間を福祉に割り報告が行えています。

■「人がすべて」「チームケア重視」

何も実績がないなか、まず豊橋と岡崎で福祉事業はスタートしました。豊橋市ではショートステイ、デイサービスがありましたが、岡崎市はケアマネジャーとヘルパーさ



ショートステイもある「ケアコープ豊橋」

ただでスタートし、徐々に拡大してきました。

人材をどう育てるかが大切です。生協の福祉で働くという時には、自分は未熟だけれどチームのなかで助け合うという気持ち大切に、仲間のなかで育っていききたいといった意志をどれだけ持っているかを重視して採用します。医療・福祉の職場では、離職原因が人間関係にある場合が非常に多いなか、このスタッフは「働きやすい」と言ってくれています。

たとえば、ケアマネジャーとサービス提供責任者は、同じ給与水準にしてきています。こういうことをやっているのは、他の生協や民間にはない。私たちは、相対的に見てヘルパーさんの役割を高く評価しています。サービス提供責任者の専門性が判れば判るほど、ヘルパーの仕事の奥深さがわかってきます。そのサービス提供責任者に、どれだけ優秀なメンバーがそろっているかが核になると思っています。非常勤スタッフも、働きやすさとか、資格を目指してステップアップしていくことを大切にしています。子どもを育てながら働いている人が多いので、子どもの学校行事のときには、休みが取りやすいようヘルパーさんどうしがカバーし合うこともずいぶんあります。

■みんなで取り組む新しい福祉政策づくり

めいきん生協とみかわ市民生協が一つになった新しいあいちの生協がめざす福祉ということで、現在、合同福祉政策作りをすすめています。政策づくりでは、大切にしたい5つのことをみんなで学習しようとしています。みかわでは8、9月に全職員が参加できるよう31ヶ所で学習会を実施しています。常勤の役職員等5人が講師で、受身ではなく学ぶということで、学んでどうなったかという感想を提出していただいています。職場の管理者や支所長、エリアマネージャーが読み、最後に私たちが読んでみなさんへ返し、自己目標をもってもらうというやり方をしています。3カ年計画も一緒に作っており、新しい生協づくりの中で、やっていきたいこと、考えていきたいことを実践的に生かしていくこととなります。

■利用者が参加してすすめる福祉を

居宅介護支援、訪問、通所をセットした複合的な事業展開をすべての行政区に広げていきたいと思っています。これまでヘルパー2級の養成講座を豊橋と岡崎で春・秋2回ずつ開催してきましたが、そこに参加できない人や新城など山間部にお住まいの方のために、今年からは通信制での講座も実施しています（実技だけは通ってやる）。

また認知症の方の家族交流会や介護教室、認知症サポーター養成講座も実施しています。福祉事業の利用者懇談会も毎年ずっとやっており参加者は207名、アンケートは2,000名の利用者の約半数、1,030名からいただいています。無店舗事業や店舗では、組合員さんの声を聞き事業に反映する仕組みができていますが、福祉は、その仕組みができていない生協が多いのですが、みかわ市民生協では利用者懇談会という形で声を

受け活かしていこうとしています。私の夢としては、福祉事業所にも店舗運営委員会のような組合員の声が反映できる委員会をぜひ作っていきたくと思っています。

■大切な地域の行政とのつながり



認知症対応デイ「ケアコープ新栄」

事業所の半数が豊橋ということで、豊橋市のケアプラン利用者の11%、ヘルパーの利用者の17%の方に、生協を利用していただいております。豊橋市では社協と生協で約50パーセントを占めています。地域包括支援センターでの相談件数は、約1,000件。高齢者の住宅での相談や、シニア元気講座ということで健康講座を市からの委託事業として実施しています。今年度、秋からの新規受託事業が生活介護支援サポーター養成講座で、地域のボランティアの方が、地域包括支援センターに集り、地域のネットワークづくりや見守りボランティアとして活動できる養成していこうというもので、ぜひやらせてほしいと市へ申し込み委託されました。

介護事業計画は3年ごとに事業計画を作ることになっており、今年で4期目に入っています。その委員をさせていただいており、豊橋市独自の利用限度額の上乗せ制度を2期目から作ることができました。たとえば、高齢者2人で元気な奥様のほうが入院すると要介護のお年寄りが一人になってしまう。それまでヘルパーさんが1日1回だったが奥さんが入院してしまい1日3回来てほしいが、2回分が限度を超えてしまう。そういう場合に奥様が退院するまで使っていいですよという制度です。この制度があるので、なんとか在宅で生活が続けられている方がいます。

佐宗さんに続いて、川合さんからもお話いただいたあと、参加者から、施設利用は一人住まいの方が自分の意思で決めているのでしょうか？施設利用ののっかかりは民生委員さんの介添えが多いが、豊橋では民生委員さんとのつながりは強いのですか？福祉事業と購買事業の相乗効果はどんなことですか等、活発に質問が投げかけられ、それぞれに丁寧な回答がされました。

最後に、みかわ市民生協職員の見山さんから、組合員の暮らしを考えたら、やれる条件があるなら、厳しいことはわかっているけどやらなきゃというところからスタートしています。苦労しましたが、その結果、信頼が広がりみなさんに受け止めていただけました。主体になるのは組合員さんだということをお大切に、みんなでまちづくりを考えていきたいと、力強いまとめのご挨拶がありました。

コープみやざきの松田さんと一緒に 生協職員の仕事について考え合いました！

研究センターのフォーラム「職員の仕事を考える」が主催し、9月6日に生協職員の仕事を考える研究集会を開催しました。今、生協の無店舗事業(共同購入、個配)は、とても厳しい経営状況にあります。この事業をどうしていくかは、職員と組合員の関係をどうしていくかという課題でもあるいえるのではないのでしょうか。研究集会では、宮崎県のコープみやざきから職員の松田(まった)修一さんに来ていただき、同生協における仕事の意味合い、やりがいについて話を伺う機会をもち、参加した職員自身が、自分たちの仕事を見直し、考えてみようとなりました。

松田さんが働いておられるコープみやざきは、組合員数22万人、事業高271億円で、東海の生協ではコープぎふより若干大きいくらいの規模です。そこでは組合員さんの声を「聴いて」「生かし」「返す」活動を一つ一つ積み重ね、コープみやざきの組織の体質にされています。

研究集会は、めいきん生協職員の田中良成さんが松田さんにインタビューする形式で進めましたが、その一部をご紹介します。

コープみやざき松田さんってどんな方？

田中：「フォーラム生協職員の仕事を考える」世話人会の田中です。今日お越しいただきました松田さんは、「まった」さんという非常にめずらしいお名前前で、始まる前の打ち合わせ中ずっと「まった」さんと呼んでいて失礼しました。松田さんが普段されている仕事について



楽しく話される松田さん

て、どこが生協職員の仕事なのか、どこにやりがいを感じられているか、インタビュー形式でお聞きしていければと思います。ここにあるコープみやざきの部内報「みらい」には、松田さんに関連して「キムタクがきた」という記事があります。そのあたりの事情から、まずお話しいただけますか。

松田：松田と書いて、「まった」といいます。年齢は、現在47歳と120ヶ月で(笑)、定年がそこまで来ています。

「キムタク」ということですが、私を見てもらったらなるほどと思う人はいないと思います。コープみやざきの職員と二人で漫才のコンビを組んでおりまして、職場で宴会がある時にやっており、この漫才のコンビ名がキムタクと言います。相方がキムチで私がたくわん。「二人合わせてキムタクで一す！」とやっていたので、そう呼ばれています。顔は関係ありません。(笑)

田中：組合員のおばあちゃんからセンターに仕事の関係で電話をもらいましたとありますね。そこでおばあちゃんが今の担当は誰と聞かれたので「担当は松田さんです」とお応えしたら、「あのキムタクですか」と言われ、利用を休まれていたんですが、「松田さんが担当なら、すぐ共同購入を始めたい」と再開されたということです。

そんな松田さんは、いろいろな仕事を経験しておられ、東海の生協でいうセンター長もされていたということですが、現在は週5日の共同購入の配達をやられています。地域の業務に戻るといふ時の心境はどんなものだったのでしょうか。

もう一度地域担当になり、感じたこと、感じていること

松田：コープみやざきで、地域担当に戻り、現在、600名の組合員、配達ポイントで200弱の地域を受け持ち、月曜から金曜日の週5日で回っています。コープみやざきの地域担当としては、平均だと思います。土日は休みです。現在、47歳と120ヶ月でがんばっています。(笑)地域担当に戻ったのは10年くらい前でした。その時は、ある意味「やったかな」「よしこれで」という思いでした。コープみやざきでは年間2回、優れた事例の発表会がありますが、私が地域担当になった時の事例の発表会で、「地責を極めてみたい！」と発言したことを覚えています。私は、生協においては最前線、組合員と接するところが一番重要な部署ではないかと思っています。そこでの仕事が極められれば最高と、いつも思っていました。本部勤務もいろいろありましたが、組合員と話をしている時が、一番仕事をしているという感じがあり、地域担当に戻って「やった」「やるぞ」という気持ちでした。コープみやざきでは仕事のスタンスを『組合員さんの声を「聴いて」「生かし」「返す」活動を一つ一つ積み重ね、組合員さんとの信頼(=安心)をつくり続ける』としています。このまず組合員さんの声を聴いてということが、地域担当の仕事だと思います。これは、ほかの部署ではできないことだと思います。無店舗、共同購入の最前線＝地域担当の仕事は、生協では一番かなと思います、がんばっています。

田中：松田さんが共同購入の仕事、組合員との関係で何を感じているのか、感じていることを教えてください。

松田：私が一番、注意していることは、生協として何かを言うのではなく、逆に組合員さんから私の方が聞く・学ぶという姿勢で、組合員に接するようにしています。そういう考えを基本にし、商品を届け、喜んでもらい、同時に元気を届けたいと思っています。最近は意識した甲斐もあり、私が行くと元気が出るという声を聞くようになりました。成果が出てきたかと思っています。

仕事、きつくありませんか？

田中：そう言っても、やはり年齢的にはきつくはないですか。

松田：きついですね。特に気をつけているのは腰痛です。支所でも立て続けに腰痛を訴える人が出てきました。北支所でトラックに乗っているのが12名で、そのうち4名が腰痛を訴えています。私は一番そこに気をつけて、できるだけ無理はしないことにしています。他の若い人も、「松田さん代わりますよ。」と言ってくれるので、「おー、サンキュ！」と言ってやってもらっています。

支所の12名の地域担当で、もちろん私が一番上で、一番若いのは24歳、20代・30代が多くなっています。生協歴でいうと1年未満も3人います。そういう中で、体力的にきつい仕事は、私がやりますとやってもらいます。逆に他のいろんな仕事の場面、共済とか、仲間づくりなどでは、若い人は私に常に聞いてきます。そういうところでは、一緒に考え、私も貢献できているかと思えます。肉体的にはやってもらって、そういうところでお返しをしているという雰囲気はあると思います。

田中：うらやましい職場の雰囲気ですね。



田中さん（左）と松田さん（右）

「生協のようにやればいいのか」「生協のようにやろうよ」と言われるように

話は変わりますが、共同購入の仕事をされていて、社会の中でも「生協のようにやればいいのか」という話題が出ていました。ご紹介いただければ。

松田：コープみやぎには「基本的考え方」というものがあります。そこには小学生でもわかるような言葉で「めざすこと」や何をするかが書いてあります。「めざすこと」では、「(1)生協は組合員さん(私たち)一人ひとりが、自らの必要のために、職員と一緒に作り、育てた組織です。くらしの願いを実現するために、観ること、聴くこと、そして応えていくことを全力ですすめます。」というコープみやぎの基本的な考え方を明確に表現しています。

もう一つは運営の面で、「(2)生協のオーナー(所有者)である、組合員さん一人ひとりが、生活(消費)し、生活に必要なものを購入するにあたって、自分の意見や要望をきちんと主張していくという自主性、願いを実現するためにみんなで協同(参加・関わる)すること、そしてコープみやぎが民主的に運営されるように主体的にかかわること、の大切さを実感できるようにしていきます。」としています。生協の運営は、組合員さんの参加が中心であり、参加というと何とか委員会に参加するということではなく、声を出す、要望を出す、それが実現される、そのことが参加ということです。普段の利用する場で、声を出し、そして職員がその声を拾うということです。「めざすこと」では、そういう運営を通じて、「生協のようにやればいいのか」「生協のようにやろうよ」と言われるようになればいいと結んでいます。実際にこれは少しずつそうになっていると思います。

地域の自治会やPTAに組合員さんが参加される時に、生協のように運営したら楽しい、うまくいくと言われるように、そういうことを目指しています。「松田さんは生協だから」ということで相談にみえたりします。職員も地域で活動し、自治会でも、地域のことで、一緒になって考えるようになればいいと思います。

(報告集の発行を予定しています。ご希望の方は、研究センター事務局までお問い合わせください。)

食と農パネル世話人会 視察報告

福井からのメッセージ

7月、食と農パネル世話人会では、昨年世話人の一人田中義二さんからご紹介いただいた「上庄の里芋」の産地福井県大野市と、その隣町にあたる福井市美山地区（旧足羽郡美山町^{あすわぐん}）に、食と農の未来を探りに行ってきました。あいにくの梅雨独特のお天気でしたが、山々に囲まれた豊かな自然の中、地元の特産を大切に、農業に挑戦されている方々、地域の文化のつながりから、町づくりの裏をあげている方々などたくさんのお会いがありました。以下、見学、交流させていただいたことの一部を報告させていただきます。

◆上庄の里芋◆

朝9時に名古屋の金山駅に集合し、名古屋高速から東海北陸自動車道に入り、白鳥インターチェンジから国道158号線に入ります。その後九頭竜湖に沿って山道を走り、途中パーキングや、道の駅で休憩を入れながらですが、3時間半の道のりで、やっと山道を抜けることができました。

福井県大野市は周りを山で囲まれた盆地にあります。冬は雪が積り、夏は暑く、この標高150mでの、冬と夏の寒暖差が大きいことが美味しい里芋を育てています。

まず大野市のJAテラル越前を訪問し、上庄の里芋の説明を聞き、女性部のみなさんの心尽くしの里芋フルコースで、その里芋のよさを存分に味あわせていただきました。昨年上庄から送っていただいた里芋は、東海の里芋の料理で味わい、それでも十分おいしかったのですが、さすが地元。昨年収穫されたものを冷凍で保存していたものということですが、そこでしか味わうことのできない味を実感しながら、詳しい説明を聞かせていただきました。名水100選に選ばれた、大野の美味しい水で、この上庄の里芋は育ち、また美味しい料理になります。地元のみなさんが、大事に育てて広めようとしていることがよくわかりました。

メニューは、里芋田楽、里芋コロッケ、里芋煮ところがし、すこ（いもの茎・ずいきの酢の物）・干しずいき（いもの茎の白和え）・いも赤飯・のっぺい汁・カルカン風里芋菓子です。上庄の里芋をふんだんに使ったメニューは、道の駅で売られていたり、地域興しにもつなげている



ということ
です。料理
を用意してく
ださった婦
人部のみな
さんは、か
なり高齢で
したが、地
元の里芋を
名物にしよう

とがんばっていらして、とても生き活きとお元気です。

たつぷりと里芋料理を満喫した後、里芋づくりについて、保健士から転職して挑戦されている上田てるみさんから、小雨の中、農園を見学させていただき、お話を聞きました。夏場は何度も水をまくなど、ご苦労されていることを、大きな里芋の葉っぱを見ながらお聞きして、私たちも一緒に栽培しているような気になりました。

この上庄の里芋を紹介いただいた羽生たまきさんも余所からお嫁にみえた方で、上田さんも転職でと、お二人とも、今は農を通じて大野市の上庄の地域を元気にしたいとがんばる女性のネットワークの核になっています。そのエネルギーはどこに源泉があるのか、この地域と人、暮らしをもっと知りたいと思いました。



◆美山錦と地酒「黎明」◆

上庄の里芋の次に、隣町にあたる福井市の美山地域で、おいしい地酒の元になる米作りに挑戦してみえる松栄さんを訪ねました。松栄さんは、関東の企業に勤めていて、地元に戻り、米作りをしようと思ってみえる40代の方です。米の栽培も、おいしい地酒のため、特別栽培にこだわり、品種にもこだわって作っていらっしゃいます。

酒米の粒の硬さは気温の影響などで毎年異なります。それに合わせて水の量を加減しないとイケないとのこと。温度管理にも気を遣う酒造り、その年々で微妙に味は違うそうです。その米からつくる地酒「黎明」は、美山の人の故郷を愛する熱い思いから誕生しました。地元で穫れたおいしいお米を、地元の水をつかい地元で仕込むことにこだわり、地元の清酒会社と一緒に試作を繰り返して、つくられています。その「黎明」という商品名

は、美山在住の豊田三郎画伯（現在101歳）の「黎明」という絵に因んで命名されています。松栄さんがつくる美山錦を原料とし、まるやかで、とてもおいしい地酒が生まれます。松栄さんは、土地も借りて米作りをされており、最初数反の田んぼから栽培を始められたそうですが、実績を上げる中で、徐々に広げているそうです。まだ、田んぼ一反で5俵しかとれないそうですが、大事に大事に育てておられることに感激しました。美山錦の籾を手に入れるために大変なご苦勞をされたこともお聞きしました。松栄さんの米づくりへの情熱、愛情をひしひしと感じ、たくさんの方の思いがなければ誕生しなかった「黎明」、美山を愛する人々の想いでこれからも毎年美味しいお酒が醸造されることでしょう。



こうした美山の地域で、大切にされている思い、産物からも、その情熱がどこから生まれるのか、もっと知りたいと感じる交流でした。

◆美山のまちづくり◆

こうして上庄の里芋、美山での米作りを体感し、その源泉はどこにあるのだろうと思ひながら、さらに美山のまちづくりのエネルギーな思いを、美山地域で大切に育てているみなさんがみえました。

それが、「みやま木ごころ一座」のみなさんであり、そこから生まれ、様々な形で町づくりをすすめるみなさんでした。

美山の町（人口5300人）に23億かけた立派なホールができたのが、すべての始まりのようです。そのホールができた時に、初代館長である林幸男さんが、民話劇団「みやま木ごころ一座」を作りました。子ども30名、大人30名の劇団です。その劇団を端緒に、美山のネットワークは紡がれていきます。文芸誌や絵画教室、ふるさとスケッチ大賞などの取り組みや、音楽と郷土料理を楽しむ伊自良音楽会、そば元気の会、そばまつり、住民手作りの祭りである伊自良祭り、「黎明」を作る越前みやま地酒の会等があります。今回は、ふくい森の子自然学校では、廃校を活用して子どもたちが農体験などをお話も聞かせていただきました。今回は、紙面の関係でご紹介できませんが、紹介したい活動でした。

そういった多彩な町づくりの活動がある中で、圧巻は「劇団ババーズ」です。平均年齢74歳、最高年齢86歳、最低年齢61歳の女性14人、男性2人で構成されています。平成14年2月に結成された劇団です。今回は私たちのために「仏になった大泥棒」を上演していただきました。

観劇させていただいて感激！「へたうま」が絶妙で、笑っているうちに泣けてしまうほどです。マスクでも取り上げられているのでご存じの方もおられるかと思ひます。



上演されるのは民話から題材をとった爆笑喜劇ですが、まずおばあちゃん達の張りのあるいい声に驚かされます。劇団の座長、林幸男さんにお話をうかがいました。8年間の演劇活動を通しての実績は、第1に声が大きくなったこと、第2に記憶力がよくなったこと、第3に病気が治ってきたことだそうです。喜んでもらったり、笑ったり、拍手をもらったりすることが、大きな充実感・達成感につながっているとのことでした。

美山は平成16年、福井豪雨で未曾有の被害を受けました。橋が何カ所も流され、越美北線は不通になりました。しかしその豪雨で直接の死者を出さなかったのはコミュニティの力だと、美山まちづくりNPOの清水正一さんにうかがいました。どこの家のどの部屋にお年寄りが寝ているということを知り尽くしている町だからこそ、死者は出さなかったと言われました。ボランティアの受け入れや、その地域の被災状況の情報など、日頃の活動がとてもきめ細やかな対応を生んだということでした。

越美北線全線復旧記念イベントが開催されたのは平成19年6月です。NPOと行政が協働で企画し、実行委員を公募しました。「越美北線盛り上げ隊」は25名で結成され、美山公民館も実行委員に加わりました。住民発の住民主体の生き活きた取り組みは、行政主導のものではなく、意義深く何より「楽しくなければまちづくりじゃない！」という言葉がすべてを物語っています。

ふるさとを愛し、まちづくりに燃える人たちと交流させていただき、こうした地域でそこにくらすみなさんが一体となる中で、初めて上庄の里芋も、美山錦という米作りも、そこに挑戦しようというエネルギーが生み出されるのかと、そんなことを実感した旅となりました。

今後、地域と協同の研究センター、食と農パネル世話人会推奨の福井への旅を企画したいと考えています。どうぞ、お楽しみにお待ちください。

（文責：伊藤小友美・大島三津夫）



日本での貧困化の動向を反映 日本での相対的貧困率を政府、公表

10月20日、長妻昭厚生労働大臣は、政府として初めて日本での相対的貧困率を公表し、2006年度の全体の相対的貧困率は15.7%、子どもの相対的貧困率は14.2%となっていることを明らかにしました。緊急な子育て支援の必要性を裏づけるデータともされていますが、その中味を見てみることにしましょう。

(概要本文は、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa08/index.html>)

相対的貧困率とは、「等価可処分所得の中央値の半分に満たない世帯員の割合」(OECDの算出方法)をいいます。今回は、厚生労働省が3年毎に実施している「国民生活基礎調査」を基に、世帯人数の差を調整した各世帯一人当たりの可処分所得を低い順に並べ、丁度真ん中の世帯員の所得(所得中央値)の半分に満たない(いわゆる「貧困線」)世帯員数が全体に占める割合として算出されました。子どもの相対的貧困率とは、17歳以下の子どもを含む世帯だけを抜き出し、その17歳以下の子どもの世帯員の所得を並べて算出します。

※等価可処分所得：世帯の可処分所得を世帯人数の平方根で割って調整した所得。4人家族では2で、仮に16人家族では4で割ることにより、稼得人員などを考慮した国際比較を可能にしています。

図1 OECD加盟国 相対的貧困率(2003年)

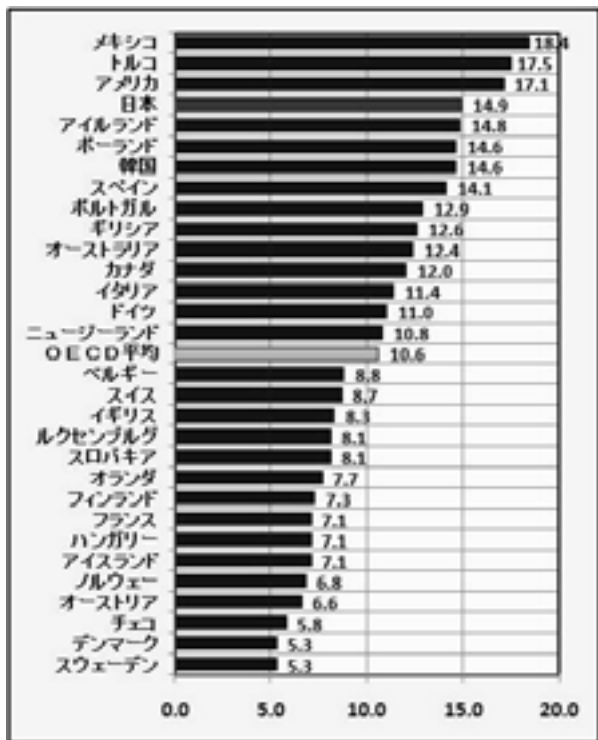
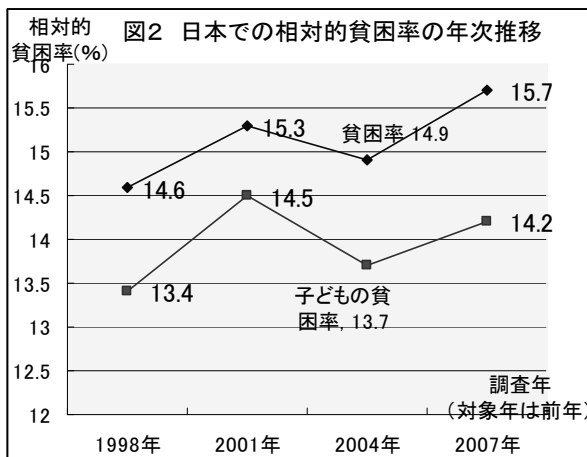


図1は経済協力開発機構OECDが発表している2003年を調査対象年とした各国の相対的貧困率調査の結果で、OECD加盟30カ国のなかで日本の相対的貧困率は14.9%で、メキシコ、トルコ、アメリカに次いで第4位と高くなっています。今回発表された日本での2006年調査(図2)では15.7%とさらに高くなっていることが判ります。

福島みずほ少子化対策・男女共同参画担当大臣は、厚生労働大臣から母子家庭、父子家庭の相対的貧困率は「OECD加盟30カ国の中でワースト1との報告を受けた」と記者会見で語っています。



INDEX

巻頭エッセー 北医療生協専務理事 田島 明	1
みかわ市民生協の福祉を学ぶ	2-3
コープみやぎきの松田さんと一緒に	4-5
福井からのメッセージ	6-7
日本での相対的貧困率公表	8

2009年10月25日(偶数月25日発行)
定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)
発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 川崎直巳
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39
TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail AEL03416@nifty.com
HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>